

【論 文】

バイソニック式（双音式）バンドネオンの楽譜における 蛇腹の開閉の表記とその活用 ー地域性および作家性の視点からー

松浦 伸吾

1 はじめにー研究の着想へ至った経緯および研究の目的

本稿は現代音楽^①の創作におけるバンドネオン奏法の表記法についての提案を行うものである。

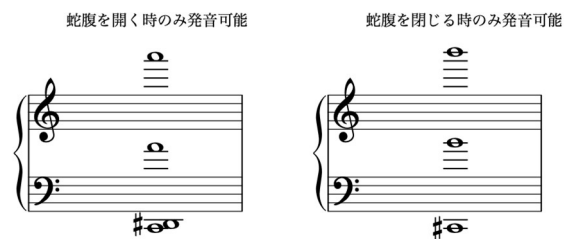
2010年に発表した論考^②の「おわりに」の冒頭において「バンドネオン^③は他の諸楽器の利点を数多く集めた楽器である」と書いた。擦弦楽器における弓の上げ下げを意識した演奏は蛇腹の開閉によって容易になされる。管楽器における吹奏のような発音は蛇腹内の空気量の増減を操作するための空気口とその開閉のためのレバーによって行える。右手親指で操作されるそのレバーを用いることで蛇腹の中に溜まった空気を瞬時に全て吐き出すことも、または一気に吸い込むことも可能である。フリーリード楽器においては唯一の、そして極めて珍しい楽器構造を有する。またその項目の結尾では「タンゴ^④音楽の慣習に強く囚われていないバンドネオン奏者、またはバンドネオンを深く知る音楽家による、タンゴ以外の音楽への参加と新しいバンドネオン音楽の創作、ということを提案」と書いた。論考^②の執筆から13年が経過した2023年の日本において、それは既に幅広く実現されている。日本には極めて卓越した演奏技能を有するバンドネオン奏者が少なからず存在する。筆者と同世代のバンドネオン奏者は10名程度だろうか。そのうちの数名はバンドネオン演奏の国際コンペティションに入賞・入選した実績を持つ。彼等の音楽歴や活動のフィールドは実に多様であり、アルゼンチンタンゴはもとより、クラシック音楽やポピュラー音楽の演奏、劇音楽や商業音楽への録音参加、ジャズイディオムによる即興演奏など、それぞれが有する職能に合わせて様々な場を自由に横断している。それを可能とする音楽環境が日本に存在していることは重要である。とはいえ海外の状況においてもそれほど違わないだろう。SNSを用いた情報発信や動画配信サイトの投稿などにより、各地のバンドネオン奏者の状況が著しく可視化された。

先に示した結尾の記述の後に「そして提案者として、演奏や創作等においてその活動に関わることができれば」と続けた。筆者は2012年から今までに、記譜とその忠実な再現に重きを置いた現代音楽を複数作曲した。筆者はバンドネオンの演奏法を既に習得している。それらの作曲の際には必ずバンドネオンを側に置き、「演奏の可否」および「演奏の難易度」を常に確認しつつ進めた。最も注意すべき点は運指である。左右にランダムに配置

された合計 70 以上のボタンの、蛇腹の開閉によって発音される音高が変化する 2 つのパターンを正しく把握した上で、両手の親指以外の四指の動きを想定して音を選択する必要がある。他の楽器では演奏が不可能となる旋律や和音も、バンドネオンにおいては演奏上相応しい、または無理が現れない、ということが度々現れる。過去に筆者へ作曲を委嘱した北村聡^⑤、生水敬一郎^⑥の両氏は筆者の作品に対し「演奏は（とても難しいが）可能」と評価した。他の楽器において容易に演奏できる内容であっても、バンドネオンで弾いた時に難解になることが度々ある、とも話していた。

運指を確定させる際には蛇腹の開閉のタイミングを考慮する必要がある。主なる理由は二つである。旋律や和声における滑らかな進行のために開閉を効果的に活用する、ということが第一に挙げられる。蛇腹を開いた時のみ、または閉じた時のみの演奏では難しい内容であっても双方を組み合わせて容易となることが少なくない。滑らかに繋げるべき長いフレーズにおいて、（その発音のために止む無く）空気口を開き空気を取り込む、または吐き出すことは、その際に現れる微細なエアノイズ音の影響も含め、音楽の流れに望まない断絶を生むことになるかもしれない。第二に、開いた時のみに、または閉じた時のみに発音可能な音高がある、という楽器構造上の制限がバンドネオンには存在する、という事情がある。例えば、第 2 節で説明するライニッシュ式バンドネオンにおいては左手側の絶対音高におけるドイツ音名 [C] [Dis (または Es)] [a¹] および右手側の [a³] は開いた時のみ、そして左手側の [Cis (または Des)] [h¹] および右手側の [h³] は蛇腹を閉じた時のみに、鳴らすことができる。

譜例 1 ライニッシュ式バンドネオンにおける蛇腹の開閉と発音可能音との関係



筆者はこれまでに作曲した作品群において、音楽表現の事情により [Cis] や [Dis] を多用した。「どの箇所を開閉を切り替えるか」を指定し楽譜に表記することはとても重要であった。2012 年に作曲したバンドネオン二台のための「二人のためのアダージョ (2012)」の中間部において [Cis] が強音に向かって長く持続する箇所があるが、これを途切れることなく鳴らすためには「発音せずに空気口を開いて蛇腹をできる限り開き楽器に空気を溜め込む」ための準備が必要である。その表記のために筆者は [←→] を置いた。[→←] は「発音せずに空気口を開き蛇腹を閉じて楽器内の空気の排出する」ことを意味する。[Abr.] は「楽器を開いて発音」、[Cer.] は「楽器を閉じて発音」としており、これらはスペイン

語の *Abriendo*（「開く」の意）と *Cerrando*（「閉じる」の意）の省略形である。アルゼンチンタンゴ演奏のための楽譜において現在に至るまで慣習的に書かれる表記に近い。この内容は第3節で取り上げる。筆者はこの4つの表記において、作曲上の事情により必要に駆られて用いた、という印象を抱く。

譜例2 松浦伸吾 バンドネオン二台のための「二人のためのアダージョ」
（生水敬一朗⁽⁶⁾氏 委嘱作品） 第62小節から第67小節

他の表記のあり方を探るべく、既存のバンドネオン譜を多数眺めた。蛇腹の開閉と共に発音することを指示する表記は既に存在していたが、バンドネオンが発明されたドイツとアルゼンチンタンゴ演奏のためのバンドネオンが輸出されたアルゼンチンや隣国ウルグアイではその表記の仕方が異なっていた。地域の特徴が反映されていると考えられる。教則本や現代音楽の楽譜には著者や作曲者が考案した独自の表記があった。楽器内の空気を吐き出すことを指示する表記についても様々あり、一般的なものが定まっていない様子である。楽器内に空気を溜め込むことを指示する表記は極めて少ない。

現在、発音のための、または発音せず空気を取り込むための4つの蛇腹の開閉の活動を示す表記において、バンドネオンの記譜で用いる五線記譜法における標準的な内容が存在しない。それらが図形的または言語的に関連づけてまとめられていない、ということは読譜および表記の解読において混乱が現れ、または表記の結果としていささか煩雑になるだろう。

本稿において、現在において点在する表記を並べて比較し、それらの利点や欠点を検証した後、標準的・一般的となり得る表記法を新たに考えたい。詳細な記譜を必要とする現代音楽の創作におけるバンドネオンの活用のためにも、この作業は重要であると思われる。表記が定まると記譜が容易となるに違いない。

2 バイソニック（双音式）・バンドネオンの定義と種類

先の論考⁽²⁾において、アルゼンチンタンゴにおいては「蛇腹の開閉によって異なる音が

発音される」バンドネオンを採用した、と書いた。当時はダイアトニック方式⁽⁷⁾と呼ぶことが広く定着し認知されていたと考える。本節において数点の補足説明を行いたい。

ダイアトニック **diatonic** は「全音階の」を意味し、具体的には1オクターブ音程内の5つの全音と2つの半音を満たす長音階および短音階などを指す。ザックス＝ホルンボステルの楽器分類法における「蛇腹楽器⁽⁸⁾」で扱われるこの用語の意味は現在まで広く「押し引き異音」と理解される。そして「押し引き」は蛇腹の開閉と同義である。この用語は主に発音のためのボタンを有するコンサーティナやアコーディオンにおいて用いられる。ボタンの少ない楽器では一般的に、全音階の各音を「押し」と「引き」で分割するようなボタン配列を用いる。「押し」のみ、または「引き」のみでは全音階の全ての音を演奏することができない。また「全音階」以外の音が省かれることが少なく無い。ボタンの数を増やした楽器では「押し引き」で同じ音高を鳴らせるようになるが、押さえるボタンの位置は必ず変更される。

バンドネオンにおいてはどうか。「押し引き異音」と称されるものの、「押し」でも「引き」でも半音階スケールを、右手側と左手側それぞれにおける最高音域と最低音域を除き、音が抜けること無く、奏することが可能である。そして両側とも少数ではあるが「押し引き同音」のボタンが存在する。楽器構造上の観点より、バンドネオンをダイアトニック方式に含めることは正しいかどうか、と疑問があった。よって本稿では、先のものとはほぼ同義だが「全音階的」という内容を含まないバイソニック式 **Bi-sonic** (双音式) を採用する。

バイソニック式バンドネオンは現在、改造物などを含めた特殊なものを除き、次の二種が主流である。ドイツにおいて過去に「標準的なボタン配列」と定められ⁽⁹⁾、主に慰安や娯楽のための合奏活動に用いられたアインハイツ **Einheit**⁽¹⁰⁾ 式バンドネオンと、アルゼンチンタンゴの演奏を第一の目的とし、アルゼンチンとウルグアイに輸出されたライニッシュ **Rheinisch**⁽¹¹⁾ 式バンドネオンである。現在においては地域を問わず、アルゼンチンタンゴを専門としないバンドネオン奏者も後者を使用することを好むようだ。独創的なタンゴを創造した A. ピアソラ **Astor Piazzola**⁽¹²⁾ の音楽歴—ジャズ、クラシック、現代音楽などを横断—から現れた影響も少なくないだろう。

アインハイツ式バンドネオンとライニッシュ式バンドネオンとの差異は楽器の外観や音色などにおいて多数存在する。左右のボタンの配列が全てではないが変更されている。それぞれのバンドネオンにおいて固有に、発音できる、または発音できない音高がある、ということは重要である。例えばアインハイツ式バンドネオンにおける右手側の **[g]** がその一つであり、この音高は M. カーゲル **Mauricio Kagel**⁽¹³⁾ によるバンドネオン独奏作品「**Pandrasbox** (パンドラの箱) (1960)」第1頁から現れる。また同作品の冒頭において左手側の「押し」で **[Cis]** と **[Es]** が同時に発音される。これらはライニッシュ式バンドネオンでは楽器構造上の理由により発音が不可能、よってこの作品はアインハイツ式バンドネオンで演奏されなければならない。武満徹⁽¹⁴⁾によるバンドネオン二台とテープのための「クロス・トーク (1968)」ではその運指の状況よりライニッシュ式バンドネオンで演奏す

ることが想定されたと考えられる。しかし蛇腹の開閉の操作方法や効果において双方に差異は無い。本稿で検証する内容はどちらの楽器にも通用するだろう。

3 蛇腹の開閉を指示する記号の様々

本節では第1節で述べた蛇腹の開閉における4つの活動についての表記の現状およびその起源を探る。

3.1 擦弦楽器の弓奏の記号を応用したものードイツ

まず最初に、19世紀後半よりバンドネオンの製造と販売をはじめたドイツにおいて、蛇腹に関する表記がどのようなものであったかを確認する。筆者が確認できた最も古い資料はP. フリース Peter Fries 著『Bandonion-Schule für 104- bis 144tönige Instrumente (1935)』である。アインハイツ式バンドネオンおよびそれが開発される前に存在していたボタン数の少ないバンドネオンのための教則本である。第8頁下部の「Das Aufzug- und Zudruckzeichen」の項目において記号の説明がある。「開く」の意味を持つ動詞 *aufziehen* の派生語である名詞 *Aufzug* の記号は [■] であり「蛇腹を開いて発音する」、「閉じる」の意味を持つ動詞 *zudrücken* の派生語である名詞 *Zudruck* の記号は [^] であり「蛇腹を閉じて発音する」ことを示している。それらの記号は擦弦楽器の弓奏における下げ弓 [■] と上げ弓 [^] を上下反転させたものである。蛇腹の開閉が弓の上下活動に似ている、と捉えたと思われる。記号の選択においては活版印刷における既存の文字や記号を応用することを優先したのではないかと筆者は考える。

譜例3 『Bandonion-Schule für 104- bis 144tönige Instrumente』

第23頁 《14. Ganze Noten》 第1小節から第8小節

14. Ganze Noten
Zähle: 1 2 3 4 1 2 3 4

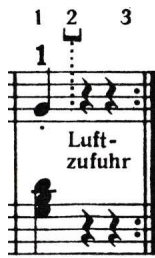
発音せずに蛇腹の開閉を行う表記は、多数の譜例を収めるこの教則本の中で数カ所のみ発見したが、独自の記号が与えられたとは言えない。先述の [■] や [^] が休符に置かれる。または「Luftausstoß (空気排出) ※ [■] が置かれた場合」や「Luftzufuhr (空気供給) ※ [^] が置かれた場合」と、それぞれの記号の側に注記が追加されている。

譜例 4 『Bandonion-Schule für 104- bis 144tönige Instrumente』

「Luftausstoß」と「Luftzufuhr」の表記

第 39 頁 《57. Walzer》

第 16 小節



第 43 頁 《63. Kleiner Walzer》

第 16 小節



M. カーゲルが作曲した「Tango Aleman (ドイツ人のタンゴ) (1978-1979)」は左右に合計 72 個のボタンを有するアインハイツ式バンドネオンを含めた四重奏の編成⁽¹⁵⁾による作品である。総譜の第一頁の前に置かれる「BESETZUNG (楽器編成)」において [■] や [∧] の説明がある。この作品においてこれらの記号は発音される時のみ、つまり音符の上にのみ置かれる。休符の上には現れない。先に書いた空気の供給および排出については表記が省略されている。休符が置かれる箇所、次に発音する蛇腹の操作に合うように、発音せずに蛇腹の開閉の状況を準備すると考えられる。

バンドネオンにおける弓奏記号の活用はドイツ国外においても有効であると推測される。アルゼンチンからフランスへ亡命した J. J. モサリーニ Juan Jose Mosarini⁽¹⁶⁾ によるバンドネオン独奏のためのアルゼンチンタンゴ編曲譜⁽¹⁷⁾を確認する機会があった。擦弦楽器の弓奏の記号 ([■] や [V]) の使用を発見、第一頁下部に「■ = en tirant (引っ張って)」、「V = en poussant (押して)」との注釈を見つけた。これらは発音時にのみ使われる。後には新しい表記として「✓ = fermeture du soufflet (蛇腹を閉じる)」と続く。この記号は [V] をより鋭くしたような形状を持ち、休符の上に表記する。

ドイツの表記において、なぜ弓奏の記号が上下反転しているのか。現時点ではその理由を見つけることができなかった。引き続き調査を進めたい。

3.2 地域の言語の影響を受けたものーアルゼンチンおよびウルグアイ

ドイツからアルゼンチンおよびウルグアイへのバンドネオンの輸出と共に、バンドネオン演奏のための楽譜や教則本がそれらの地にもたらされたと考えられる。ドイツにおいて活用された [■] や [∧] の表記はスペイン語の Abriendo および Cerrando の頭文字に置き換えられた。バンドネオンの教則本として有名な P. アンブロス Pedro Ambros 著

『Metodo Completo para Bandoneon Op.101』ではアルファベットの大文字が使われる。「Instrucciones（取扱説明）」の項において [A] は「蛇腹を開く」、[C] は「蛇腹を閉じる」と説明がある。また「右手側の金属のレバーは必要に応じて空気を吸い込むことに役立つ」とも書かれている。楽譜を参照すると、先述の [A] と [C] は発音時の表記であることが分かる。金属のレバーの操作についての表記は無く、また「吸い込む」という記述があったが実際には「吐き出す」ことが多い。無音での蛇腹の開閉を指示する表記は存在しない。表記が置かれる場所は大譜表における 2 つの譜表の間である。

譜例 5 『Metodo Completo para Bandoneon Op.101』

第 28 頁《32.》 第 1 小節から第 8 小節



バンドネオンでクラシック音楽を演奏した先駆者として名高い A. バルレッタ Alejandro Barletta⁽¹⁸⁾ が書いた作品群も同様の表記である。「Suite Infantil N°.1（子供の組曲 第一番）」より第 2 曲目《Marcha del Hada（妖精の行進）》の冒頭 4 小節を見ると、蛇腹の開閉を示す [A] および [C] とは別に、第 1 小節と第 3 小節の一拍目にマルカートを示す記号 [Λ] を発見する。この記号はドイツにおける [Λ]（蛇腹を閉じる）と良く似ており、それは [A] が示す指示とは逆である。


譜例 6 「Suite Infantil N°.1」第 4 頁《2. Marcha del Hada》 第 1 小節から第 4 小節











アルゼンチンタンゴの楽譜では、バンドネオン独奏用のものに限定して [A] や [C] が細かく指示される場合が多いと思われる。蛇腹を指示通り操作しないと演奏が困難になることがある。音の数が多く複雑な内容を持つことが理由であろう。室内楽や多人数の編成

において弾かれるバンドネオンの楽譜は独奏用のものよりは単純であることが多い。そして蛇腹の開閉の指示を置かない場合が通例である。アルゼンチンタンゴを演奏するバンドネオン奏者はそのジャンルの特有の演奏方法を、記譜から読み取るのではなく演奏の習慣として直感的に操ることが求められる。歯切れ良いスタッカート音を発音するためには、その度ごとに空気口を開けて瞬時に空気を吐き出す必要がある。またアルゼンチンタンゴでは、発音における出だしの勢いが強い [A] で演奏することを基本としている。[C] は必要に応じて活用する程度である。[A] や [C] は必要に応じて奏者によって手書きされる。これは現在における擦弦楽器奏者によるボウイングの書き込みと大きく変わらない。空気の吸入や排出についても同様であろう。しかしそれを指示する表記が厳格に決まっているわけでは無い。

3.3 新しく考案されたもの一作家性

M. カーゲルの「Pandrasbox」は演奏者の行為を中心に計画される作品である。シアターピースと呼ばれる。蛇腹操作のための記号が多数、作曲者によって考案されている。2つの例を挙げる。冒頭においてドイツにおける表記  右上より点線矢印が五線と平行に右に弾かれているが、これは「左側を固定し右側のみ用いて蛇腹を開き空気を吸い込む」ことを意味する。点線矢印が終わるタイミングにおいて左手側で [gis²] が発音される。後に上下に細かく揺れる実線矢印が書かれた箇所が現れる。これは発音しながら蛇腹を小刻みに振動させることを指示している。

武満徹も「クロス・トーク」において蛇腹の開閉の表記を新たに考案している。表記説明の頁において3つの記号が現れる。「 pull(引く)」は  および [A] に、「 push(押す)」は [A] および [C] に等しい。そして武満はその音楽表現のために「push then immediately pull. (押してすぐに引く)」と説明される  を活用した。第一バンドネオン奏者の楽譜の冒頭にこの表記が置かれるが、その演奏表現は強い動悸のような切迫感を感じさせる。2人のバンドネオン奏者による蛇腹の開閉の動作がその作品を成立させるための重要な視覚的要素となっていると考えられる。









日本で出版されたバンドネオン教則本においても様々興味深い表記を発見する。石居康介著『バンドネオン・メソッド』では「[out]=引き」と「[in]=押し」と説明される。武満の push と pull に等しい。 が置かれる箇所では空気口を開いて楽器内の空気を排出する。石居氏はこの動作を「次の演奏に入るための準備」としている。収められた練習曲においてマルカート記号  が頻出している。バンドネオン演奏においてマルカート奏法が大きい価値を持つのだろう。尾澤昌仁著『初心者のバンドネオン教本』においては丸囲い文字の [Q] と [C] を使うが、置かれる場所は大譜表における高音部譜表の上部である。また [C] においては演奏箇所を上向き破線角括弧で具体的に示す。 の記号は先述の  に等しい。














地域性と作家性という視点より蛇腹の開閉における表記の状況を眺めた。筆者が検証した楽譜の量は僅かであるにも関わらず、その様相は実に多様であった。勿論これらが表記の全てであるとは考えられない。他にも異なった表記の方法が多数存在するに違いない。

4 比較と検証

第3節において現れた表記の一覧を以下の表に示す。蛇腹の開閉の表記において基準が定まっていない、ということが分かる。

表1 地域性および作家性の視点から眺めた蛇腹の開閉における4つの活動の表記

蛇腹の操作 および発音の 有無	地域性		作家性			
	ドイツ およびその周辺国	アルゼンチン およびその周辺国	カーゲル 「Pandrasbox」	武満 「クロス・トーク」	石原 『バンドネオン・ メソッド』	尾澤 『初心者の バンドネオン教本』
蛇腹を開いて 発音する	 擦弦楽器の弓奏における ダウンボウ  の記号を 用いることもある	A 囲み文字で表記する ことも少なくない	 および上の記号に矢印 他の記号を追け加えた 表記も用いる 演奏表現や身体表現を 具体的に指示	♂	Out	Ⓐ
蛇腹を閉じて 発音する	 擦弦楽器の弓奏における アップボウ  の記号を 用いることもある	C 囲み文字で表記する ことも少なくない	 および上の記号に矢印 他の記号を追け加えた 表記も用いる 演奏表現や身体表現を 具体的に指示	♀	In	Ⓑ
蛇腹を開いて 楽器内に空気を 貯める	 の側に Luftzufuhr (空気供給) と注記 または表記しない	表記しない	新たに考案された 表記が様々な存在 空気の貯め方を 具体的に指示	表記しない	表記しない	表記しない
蛇腹を閉じて 楽器内の空気を 排出する	 の側に Luftausstoß (空気排出) と注記 または表記しない J. J. モサリーニは バンドネオン独奏の 楽譜において ✓を用いていた	表記しない	新たに考案された 表記が様々な存在 空気の排出の仕方を 具体的に指示	表記しない	▽	↓

地域性の視点より問題点を考察する。ドイツおよびその周辺国における  の表記はマルカート記号  に似ている。 ではなく  を用いると、しかもその標準的表記の場所である高音部譜表の音符または休符の上に置かれると、マルカートの指示だと誤解してしまう可能性がある。一音の上に  と  を積み重ねて表記されることもあるかもしれない。譜例6を参照するとその状況が容易に想像できる。アルゼンチンおよびその周辺国における  や  は大譜表における高音部譜表の、または大譜表において片方の譜表が省かれたものの上部に置かれることも少なくないが、リハーサルマークにアルファベットの太文字を使った楽譜の場合、その表記と似る。譜例3における  を  に、 を  に置き換えてみると分かりやすい。リハーサルマークAのすぐ隣に  が、

そして2小節目には[A]が現れる。リハーサルマークとしてのドイツ語と開閉表記としてのスペイン語が混同した状況を楽譜上に生む。読譜において煩雑な印象を与えるに違いない。ひとつの記号、または類似する記号に対し、複数の意味が与えられている現状がある。それぞれの表記がローカルまたはプライベートな環境で育まれた所以であろう。それらの複雑な状況は、流通の円滑化や情報取得の容易さが顕著である現在においてそのまま、グローバルに紹介されている。

作家性の視点から筆者は『バンドネオン・メソッド』における発音を含めた蛇腹の開閉について言及する。[Out]と[In]という英語表記にはドイツやアルゼンチンおよびそれぞれの周辺国が長く有していた独自性の影響が含まれていない。筆者はこれを現在において相応しい態度であると捉えた。バンドネオンが特有の地域や音楽と強く結びついていたのは過去のことである。現在においてバンドネオンの存在やその楽器の持つ音楽性が幅広く認知され、そして様々なジャンルに活用されている、ということは第1節において示した通りである。

5 おわりに

スペイン語圏の音楽のひとつであるアルゼンチンタンゴを専門とするバンドネオン奏者であれば、蛇腹の開閉の表記においてスペイン語のアルファベットを用いることは、その言語が音楽文化の一端を担うという観点より、至極自然なことであろうと想像する。「標準的なボタン配列」と定めたアインハイツ式バンドネオンを成立させたドイツではその楽譜において、擦弦楽器の弓奏における表記を応用することも「標準的な表記」と定めたのかかもしれない。日本で出版されたバンドネオン教則本における独自の表記法の考案は、色濃く反映された地域性の影響を持つ過去の表記の数々を俯瞰した上での、新たな提案としての創造的活動であったのかかもしれない。現代音楽分野においては作曲家個人が、音楽表現の楽譜への効果的な記述のために表記法を作り出すことは珍しいことではない⁽¹⁹⁾。西洋芸術音楽においては過去より今まで継続している態度である。

筆者は蛇腹の開閉において「直感的に読解できる表記」を探っていた。第1節で示した4つの表記 [Abr.] [Cer.] [↔] [→←] を筆者は長く活用しているが、まだ「他のものよりかは幾分把握しやすい」という程度のものであり、これらが最善であるとは思えない。「文字を使わず記号のみで表現する」、「4つの表記が何らかの要素によって関連づけられている」、「他の作曲家が活用しやすい表記である」という3点を大事にしつつ、筆者はこれらの表記において、三角形と先述の矢印を用いた一つの案を提示したい。[Abr.] を [↔] に、[Cer.] を [↔] に変更する。[↔] と [→←] は残した。蛇腹の開閉の方向や発音の有無が一目で分かる。

本稿の最後に、これらの表記を試しに用いた自作品「画廊にて (2017)」の楽譜を紹介する。他の表記と混同しにくい、判別しやすい表記であるという印象を持つ。バンドネオンを含めた作品の作曲に取り組みたい、と考える作曲家への一助となれば、と願う。現代音

楽におけるバンドネオンの活用実績は今日までにおいて、まだ少ない。

譜例 7 松浦伸吾 バンドネオンとチェロのための「画廊にて」（北村聡⁽⁵⁾氏 委嘱作品）
第 6 小節から第 12 小節

The musical score is presented in two systems. The first system covers measures 6 to 12. The Violoncello (Vc.) part is written in bass clef with a key signature of one sharp (F#). It includes markings for 'nat. arco', 'sul D', 'sul G', 'pizz', 'c. l. (b.)', and dynamic markings such as 'pp', 'mp', 'p', and 'ppp'. The Bandoneon (Band.) part is written in treble clef and includes 'ppp' and 'pppp' markings. The second system covers measures 9 to 12, marked 'Moderato, rubato' with a tempo of 'ca. 63'. It includes markings for 'sul tasto', 'nat.', and 's. t.', along with dynamic markings like 'ppp', 'mp', 'mf', 'p', and 'ppp'.

註

- (1) 本稿では「西洋芸術音楽の流れを汲む 20 世紀から現在までの音楽」として扱う。
- (2) 松浦伸吾 2010「バンドネオンの演奏表現における可能性—楽器構造の視点より—」大阪音楽大学音楽博物館『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』第 25 巻
- (3) ボタンの鍵盤を持つ蛇腹楽器。発音構造はアコーディオンに似る。主にアルゼンチンタンゴにおいて用いられてきた。
- (4) ここでは「アルゼンチンタンゴ」のことを指す。
- (5) バンドネオン奏者（1979-）。
- (6) バンドネオン奏者（1981-）。
- (7) 2010 年の論考⁽²⁾では「ディアトニック」という名称を用いていた。現在は「ダイアトニック」が一般的である。
- (8) 枠の中にある薄片を蛇腹操作による気流を用いて振動させて音を鳴らす楽器。
- (9) 【1924 年、エッセン市で「ドイツ・コンツェルティーナ&バンドネオン連盟

(Deutsche Konzertina und Bandonion Bund)」の全国会議を開いた。各社で異なるサイズ、ボタン配列、音色……今後のバンドネオンとコンツェルティーナの方向性についての折衝が行われた。】『タンゴの真実』 第 352 頁

- (10) 【「これをドイツ国内のバンドネオンの標準と位置付けよう」というモデルとして、「統一型（アインハイツ型）バンドネオン」が開発されることとなった。】『タンゴの真実』 第 353 頁
- (11) 「ライン川の」を意味する。
- (12) 作曲家、バンドネオン奏者 (1921-1992)。
- (13) 作曲家 (1931-2008)。
- (14) 作曲家、音楽プロデューサー (1930-1996)。
- (15) 歌手、ヴァイオリン、144 音アインハイツ式バンドネオンとピアノ。
- (16) バンドネオン奏者 (1943-2022)。
- (17) 参照楽譜：Federico, Leopoldo. (Doigtés: Mosalini, J. J.) 1988. *Un Fueye en Paris*. Edited by Edition Henry Lemoire
- (18) 作曲家、バンドネオン奏者 (1925-2008)。
- (19) 作曲家 B. バルトーク Béla Bartók が考案した「バルトーク・ピチカート [♭]」等。

参考文献

(書籍)

- 石居康介 1999 『バンドネオン・メソッド』 エー・ティー・エヌ
- 尾澤昌仁 2003 『誰でも弾ける！バンドネオン 初心者のバンドネオン教本』 オンキョウパブリッシュ
- 小沼純一 1997 『ピアソラ』 河出書房新社
- 小松亮太 2021 『タンゴの真実』 旬報社
- 斎藤充正 1998 『アストル・ピアソラ・闘うタンゴ』 青土社
- Schnebel, Dieter. 1970. *Mauricio Kagel Musik Theater Film*. Edited by Verlag M. DuMont Schauberg
- Salgan, Horacio. 2001. *CURSO DE TANGO 2DA. EDICION*. Edited by Salgan, Horacio.
- Ambros, Pedro. 2004. *METODO COMPLETO PARA BANDONEON Opus 101*. Edited by RICORDI AMERICANA
- Fries, Peter. 1950. *Bandonion-Schule für 104- bis 144tönige Instrumente*. Edited by Apollo-verlag Paul LINKE, Mainz

(引用楽曲)

- 松浦伸吾 2012 「二人のためのアダージョ」
- 松浦伸吾 2017 「画廊にて」

Barletta, Alejandro. 1957. *2. Marcha del Hada* de Suite Infantil N°1. Edited by
RICORDI AMERICANA